

過敏性腸症候群傾向者の対人関係様式に関する基礎研究

本研究では、ストレスが原因だと考えられている心身症の代表的な病である過敏性腸症候群（以下 IBS）のアレキシサイミア傾向，対人依存傾向，文章完成法（投影法）で測定される対人関係様式（VAT）における特徴を明らかにすることを目的とした。IBS 有無の判定は、IBS の医学的診断基準である Rome3 に基づいて作成された過敏性腸症候群スクリーニング尺度の質問項目の回答をもって分類された。大学生 266 名（平均年齢 19.69 歳）を対象に調査を行い、最終的に IBS 群は全体の 4.15%に当たる 11 名，non-IBS 群は 255 名であった。分散分析及び X^2 検定の結果，対人依存欲求尺度においては違いが認められなかったが，VAT については「依存－否定」で IBS 群のほうが non-IBS 群より有意に高く，「依存－肯定」では IBS 群のほうが non-IBS 群より有意に低い得点を示した。すなわち，IBS 群は他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得る欲求を肯定的に反応しにくく，否定的な反応をしやすいことが明らかになった。これらの研究結果から，IBS は対人関係場面で自らのために他者に頼ることが難しいと考えられた。IBS を理解する際に，このような意識化されていない対人関係場面の困難も視野に入れることで，不適応などの問題に焦点を当てて支援し，介入することが重要であると考えられた。